

# 「主体の埒外」のカタストロフの数々<sup>1</sup>

ヨアン・モロー

(吉松覚・訳)

カタストロフはそのラディカルさにおいて、致死的で、思考しえず、不可能なものとして現れるものに、われわれを直面させる。カタストロフは、「三乗の〔*au cube*〕」問い、すなわち実存の三つの作用域〔*registre*〕にかかわる問いを立てる。ここでいう実存の三つの作用域とは、有機的な生命〔*la vie organique*〕、象徴的な生氣〔*la vitalité symbolique*〕そして社会における組織化〔*l'organisation en société*〕である。その表出のうち、もっとも強烈なものは「急激発作〔*sidération*〕」<sup>2</sup>であるが、それは思考や行為、そして生理学的な機能の運動が多かれ少なかれ引き伸ばされた宙吊りという形で現れる。たとえば、決断を下す能力がしばらく枯渇している、自分の経験を伝える能力が一時的にばらばらになっている、そして食欲がしばしのあいだ失われる、といった次第である。というのも、カタストロフは、筆舌に尽くしがたく、未曾有で、吸収することのできないものとしてまず現れる部分を勃発させるからだ——そしてこのことがカタストロフを特徴づけるのだ。カタストロフは（物質的な現実の）瓦解や（象徴的な領域の）眩暈として理解されるわけだが、カタストロフ（ギリシア語の *kata* すなわち「下方へ行くこと」と、*strophein* すなわち「回りながら、旋回しながら」からなる）は世界の裏

<sup>1</sup> Yoann Moreau « DES CATASTROPHES « HORS SUJET » », in *Communications* 2015/1 (n° 96), p. 5-18.

<sup>2</sup> 〔訳註〕電気ショックや急激な循環障害、発作、あるいは生活機能が突如として崩壊することをも意味することに注意されたい。また、この語は語源的にはラテン語の「星」を意味する *sidera* に由来し、星の巡りに兆される不吉な兆候からきていることは、「災厄」を意味し、同じく不吉な星回りのイメージに由来する *désastre* とも響きあう。

側を、世界の「呪われた」<sup>3</sup>部分、世界の不浄な＝非世界的な〔immonde〕部分を開陳する。この種の状況が生み出す、全面的な発熱状態を脱することは通常、想像的なものや知性の諸々の様態、物語を経由してなされる<sup>4</sup>。

事実、大いなる宇宙論的脱却〔*déprises*〕の対処は、「消化」と「クールダウン」の期間を、すなわち自分を取り戻すと同時に意識を取り戻す〔*reprendre à la fois pieds et conscience*〕ための時間を必要とする。アカデミックな領域では、長い時間性を扱う歴史家たちの研究が、大いなる脅威に対峙するために動員される防衛機制や保存機制から最も解放されたものとして現れている<sup>5</sup>。フランソワ・ヴァルテールによって書かれた、16世紀から21世紀にかけてヨーロッパではカタストロフをいかに対処し形容してきたかについての文化史は、解釈図式の継続した「共存」を明らかにしている。すなわち、支配的な図式がどのようなものであれ（摂理主義的であれ自然主義的であれ、聖書に基づくものであれ哲学的なものであれ、道徳的なものであれ科学技術至上主義的なものであれ）、当の図式は、知性の「副次的な」<sup>6</sup>体制と共存しているということである。説明の正当性や説明に用いられる論理が時代によって移動するにもかかわらず、大いなる無秩序がそのたびごとに感知され、それは多様な要素からなる認知的解釈学的な枠組みの力を借りて解釈されるのである。たとえば、災禍として、災厄として、カタストロフとして、危機として、リス

<sup>3</sup> (ジョルジュ・バタイユが言う意味での)「呪われた」部分は、世界をなす技法、複数の世界をなす技法と関係するのだが、それは他の世界の「祝福され」、望まれた部分に対応しうる。Yoann Moreau, « Approche anthropologique de la vulnérabilité et des aléas majeurs », in André Monaco, Patrick Prouzet (dir.), *Risques côtiers et Adaptations des sociétés*, Croydon (G.-B.), ISTE Editions, 2014, p. 275-310を見よ。

<sup>4</sup> カタストロフの経験を物語にするプロセスの詳細については、例えば以下を見よ。Julien Langumier, *Survivre à l'inondation. Pour une ethnologie de la catastrophe*, Lyon, ENS Édition, 2008.

<sup>5</sup> François Walter, *Catastrophes. Une histoire culturelle, XVI<sup>e</sup>-XXI<sup>e</sup> siècle*, Paris, Seuil, 2008 ; Anne-Marie Mercier-Faivre, Chantal Thomas, *L'Invention de la catastrophe au XVIII<sup>e</sup> siècle. Du châtement divin au désastre naturel*, Paris, Librairie Droz, 2008 ; Grégory Quenet, *Les Tremblements de terre aux dix-septième et dix-huitième siècles. La naissance d'un risque*, Seyssel, Champ Vallon, 2005.

<sup>6</sup> François Walter, *Catastrophes. Une histoire culturelle, op. cit.*, p. 79-84.

クとしてといった具合にである。こうした解釈の多様性は、カタストロフ以後の論争を生み出し、当の論争を可能にもする<sup>7</sup>。これらの物語——その各々が一部真実性を持っているわけだが——のネットワークを介して、こうした社会的生の危機的瞬間は、無秩序を解釈するさいの複数の道行き同士の論争を編成する文化マトリクスを再形成するのだ。実存の地平の再構成は知解可能性〔intelligibilité〕の複数の体制（たとえば自然主義的、宗教的、歴史的、経済的体制など）のおかげで、具体的な形で作りあげられる。これらの体制はお互い協力しあって解釈学的装置を組み立てる。この装置においては、カタストロフとともに生じるもの——いくばくかの非-知、いくばくかの苦痛、空虚感など——が次第に、耐えられるものとして、受け入れられるものとして、そして理にかなったものとして現れうるのである<sup>8</sup>。

「論争する」素養が〔世界や秩序などを〕覆して一変させるようなものを翻訳するのに必要であるという仮説を採用するなら、われわれの社会の数々を編み上げるような説明の複合体に最大の注意を払う必要がある。事実、支配的な文化マトリクス——これは物理化学的プロセスや社会的プロセスを制御することの地平とその期待によって動機づけられている<sup>9</sup>——は、過小評価された、よりマイナーな解釈図式と共存している。いかなる出来事〔événement〕も——まさにそれは一大センセーションを巻き起こす〔faire événement〕のだから——、(歴史的)連続性や(技術的)コントロール、(象徴的かつ社会的な)安心感を与えることの勢力圏のうちに完全に刻みこまれることはありえない。いかなるカタストロフも、蓋然性を付与された不測事態というカテゴリーに還元することはできない。ただ一つのカテゴリーが——現行の意思決定の論理の見地からすれば操作的であるとはいえ<sup>10</sup>——、

<sup>7</sup> 典型的な研究ケースとして、Sandrine Revet, *Anthropologie d'une catastrophe. Les coulées de boue de 1999 au Venezuela*, Paris, Presses Sorbonne Nouvelle, 2007を見よ。

<sup>8</sup> カタストロフへの対処の装置としての論争の分析として、Yoann Moreau, *Catastrophes et Mondes. Disputes et trajectoires du sens des aléas majeurs*, thèse de doctorat soutenue à l'École des hautes études en sciences sociales, à Paris, le 13 octobre 2013 (出版準備中)を見よ。

<sup>9</sup> この点にかんして、災害学の、とりわけSusanna Hoffman, Anthony Oliver-Smith, *Catastrophe and Culture. The Anthropology of Disaster*, Oxford / Santa Fe, School of American Research Press, 2002の、(ときに間接的な)恩恵にあずかったことを特筆したい。

<sup>10</sup> [Communications誌の] 本号所収のSandrine Revet, « Compter et raconter les catastrophes »を見よ。

一切の無秩序の特異性を隠蔽してしまう。すなわち、(ブランシヨの言う意味での)他性、外部、「夜の闇」、要するに、カストロフが意味の欠如によって「語る」もの、陰画という形でさらけ出すもの、シルエットという形で示すものすべて〔の特異性を隠蔽してしまうの〕である<sup>11</sup>。したがって、(エコロジー的、技術的、象徴的な)全面的脱却という状況の折衝に参加する、支配された数々のパラダイムを、支配的な近代というパラダイムとともに、二度にわたって熟考する必要がある。確かにこのことは、たとえばドミニク・プール、ピエール＝ブノワ・ジョリー、アラン・コフマンが提唱してきたようにカテゴリーの位置ずらしを経由する(注29〔本訳稿における注33〕を見よ)。それはまた、「知解可能性の破綻<sup>12</sup>」としての出来事という観念についてアルバン・ベンサやエリック・ファサンが提唱してきたように、あるいは象徴的領域の極性化として了解されたカテゴリーという観念そのものについてメアリー・ダグラスが提唱してきたように<sup>13</sup>、はたまた「部分的な秩序<sup>14</sup>」としての無秩序についてジョルジュ・バランディエが提唱してきたように、諸々のカテゴリーのアップデートによってもたらされもする。しかし、より目立たない仕方でも働く信用失墜——諸カテゴリーについての単純な研究ではこれを完全に捉えることはできないだろう——にも注意を払わねばならない。

いかにしてカストロフを、われわれの現実を構成するものとみなすことができるだろうか。カストロフとともに生きるということ、いかにして企てることができるだろうか。言い換えるなら、あたかもカストロフが思い出〔souvenir〕の次元のその後という地平のうちに突如として到来し〔survenir〕たり、そのような地平のうちに捉えられたりすることがあってはならないかのようにではなく、あたかもわれわれが共存という関係を通じてカストロフを事実と認め〔en convenir〕

<sup>11</sup> この表現は私が荻野昌弘(〔Communications誌の〕本号所収の彼の論文「Catastrophe et temps」を見よ)から借用したものである。

<sup>12</sup> Alban Bensa, Éric Fassin, « Les sciences sociales face à l'événement », *Terrain*, n° 38, 2002, p. 5-20.

<sup>13</sup> Mary Douglas, *De la souillure. Essai sur les notions de pollution et de tabou* (1966), Paris, François Maspero, 1971. [メアリー・ダグラス『汚穢と禁忌』塚本利明訳、思潮社、1972年]

<sup>14</sup> Georges Balandier, *Le Désordre. Éloge du mouvement*, Paris, Fayard, 1988, p. 58.

なければならないかのように「[することはいかにして可能なのか]、ということである<sup>15</sup>。このパースペクティブは、近代を支配する合理性と諸々の科学技術の周縁のなかに、「補充的支払い=対抗—論争 [contreversement]」<sup>16</sup>によってカタストロフを引き受けるということに具体的に参与する科学技術を見分けることができるということを前提する。

イザベル・ステンゲルスは大規模な脅威に対する引き受けの、プラグマティックな操作として名づけの行為を再考するよう提唱してきた。「ガイアと名づけることは、到来するものによって思考すること [を余儀なくさせること] である」<sup>17</sup>、このことは、惑星規模の広大さおよび、それを貫く世界的現象の把握を形づくるということである。すなわちそれは、近代が拒む形而上学において急変することなく超越を言い表すということである。名づけることによって、共現前として想定された偶発性の地平のうちに刻み込まれる——そこには「自然的」と形容される諸々のカタストロフも含まれている——ことが可能になる。この観点は、「厳格」と言われる科学がもつ量の論理に対してバランスを保つ、有用なカウンターウェイトを形成するということがも明示する必要があるだろう。

哲学者ギュンター・アンダースの響に倣って、これらの大転覆を不可避なものと思えずということもできよう。このエピステーメー的な地平の変化は、来たるべき

<sup>15</sup> このcoexistence (日本語の「共存」[という語]の翻訳) という考えについては、Marie Augendre, *Vivre avec le volcan. Une géographie du risque volcanique au Japon*, thèse de doctorat, Université Lyon II, 2008を見よ。

<sup>16</sup> [訳注] 原語のcontreversementはモローの造語であろうと思われる。接頭辞contreには「対抗」「逆向き」「補充」「接触」「均衡」などの意味があり、とりわけ「補充」や「均衡」の意味でcontre-assurance [補充保険] という語も存在する。versementは「支払う」などを意味する動詞verserの名詞形で、この語はさらに、語源的にはラテン語の「回転する」を意味するvertereに由来する。また「論争」を意味するcontroverseは「論争」を意味するが、これもまた接頭辞contre (ここでは「対抗」の意) とvertereの過去分詞versusに由来している。これらの意味の重なり合いを踏まえて、上のように訳した。

<sup>17</sup> Isabelle Stengers, *Au temps des catastrophes. Résister à la barbarie qui vient*, Paris, Les Empêcheurs de penser en rond / La Découverte, 2008, p. 72、また Jean-Pierre Dupuy, *Petite Métaphysique des tsunamis*, Paris, Seuil, 2005 [ジャン=ピエール・デュピュイ『ツナミの小形而上学』嶋崎正樹、岩波書店、2011年] も見よ。

カタストロフに対する新たな戦略を可能なものとしてくれる。このパースペクティブにおいて、プラグマティスト的なアプローチが構成するのは、体制から——そこにおいて当の傾向は停滞してしまうのだが——、そして蓋然性を付与された偶発性からカタストロフを追い払うことを目標とする傾向の、「柔軟な」ヴァージョンである。近代的主体と将来の世代とをつなぎ合わせることで、可能なものを現実化する他の数々の様態に賭ける（予防策や責任の）革新的な原理をうちたてることが可能になる。ジャン＝ピエール・デュピュイは、よりラディカルな態度に裏打ちされた「策略」を提唱してきた。すなわち、あたかも未来がカタストロフ的な地平によって規定されているかのようにわれわれが振る舞うとしたらどのようなになるだろう〔という疑問によって提示される策略である〕。このパースペクティブは一部予言的であり、ヨナスの用いる聖書にまつわる形象に適合している反面、アカデミックなエピステモロジーの見地からするとまったくもって単独的であるわけだが、それはさしあたり、永遠に現代的ならざるもの（つまり蓋然性を付与された将来）に属するものを具体的にしようとするという長所を持っている。このパースペクティブはまた、カタストロフを経験する〔vivre〕ための本質的な二つの判断基準を再導入してくれる。すなわち事実に基づく次元と、カタストロフに対して諸個人がもつ「一貫性〔consistance〕」（この語はラテン語で「一続きであること」を意味する *consistere* に由来する）の必要性である。ジャン＝ピエール・デュピュイが強く勧めるのは主体を取り巻くものに対する当の主体への単純な責任の押し付け〔*responsabilisation*〕ではなく、さらに深い次元での変容である。彼の「賢明なカタストロフ論」<sup>18</sup>によってもたらされるのは、合理性と虚構が、事実性と予期が緋い交ぜになる現実に個人が参入させられるということ、そして個人はあたかも諸々の可能性が単純な「オプション」を構成しないかのように振る舞うということである。したがって、責任ある主体はこう言う。「もしカタストロフが生じたとしたら、私はそれを引き受け、カタストロフの代価を支払うことだろう」と。一貫した個人は

<sup>18</sup> Jean-Pierre Dupuy, *Pour un catastrophisme éclairé. Quand l'impossible est certain*, Paris, Seuil, 2002 [ジャン＝ピエール・デュピュイ『ありえないことが現実になるとき——賢明な破局論にむけて』、桑田光平・本田貴久訳、筑摩書房、2012年]、また « Le temps des catastrophes », numéro d'*Esprit*, de mars-avril, 2008 も見よ。

こう述べる。「もしカタストロフが起こったとしたら、私はその代価を支払うことはできないだろうし、それゆえに私は責任を負うことだけはできず、具体的に行動する義務がある。このことによって私はあたかもカタストロフの蓋然性が確かであるかのようにすることを強えられる」と。

カタストロフを経験〔*expérience*〕（この語はラテン語の*expericulum*すなわち危険なものを横断することの遂行に由来する）の領域と見なすことによって、われわれはまた、跛行的なもの〔*du bancal*〕と不安定なもの〔*du précaire*〕の論理、儀礼と神話の論理にも注意を向けるよう促される。しかし、だからといって重要なのは、レヴィ＝ストロースが「野生の思考」と呼んだものの効果を過大評価することではなく、合理性と策略（*métis*）、エンジニアの技術と日曜大工の機転、歴史的な時間性の体制と神話的な時間性の体制、異化効果というパースペクティブと参加という装置それぞれのあいだの、ありうべき結びつきと組み合わせについて熟考することである。これらの文化的図式、それらの「構成」<sup>19</sup>と相互的な文化変容〔*acculturation*〕のプロセスの出現の出会いを考えることによって、排除された第三者についての論理の千年来の旧弊の探求を引き出すことが可能になる。このパースペクティブにおいては、支配的とされるオルタナティブ〔*alternative*〕という観念が問題なのではなく、輪番〔*alternance*〕という観念が重要なのである。ジル・ドゥルーズによって導入された区別を繰り返すなら<sup>20</sup>、もはや排除による整合性（〔選言の接続詞〕あるいはを用いることで盛り込まれる整合性）ではなく、多数の図式の「屈折」<sup>21</sup>によるダイナミズム（〔順接の接続詞〕との使用によって動員されるダイナミズム）を促進する必要があるだろう。それは十全な意味でも不合理でもなく、理にかなったものである。それはまた、合理的なものや想像的なものではなく知解可能なものである。それはエンジニア〔*ingénieur*〕でも日曜大工でもなく、

<sup>19</sup> Philippe Descola, *La Composition des mondes*, Paris, Flammarion, 2014.

<sup>20</sup> Gilles Deleuze, *Le Pli. Leibnitz et le baroque*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1988. [ジル・ドゥルーズ『襞 ライプニッツとバロック』宇野邦一訳、河出書房新社、2015年]

<sup>21</sup> フランソワ・ラプランティエヌが言う意味においてである（〔*Communications*誌の〕本号所収の私と彼の対談「*La dimension subie*」を見よ）〔訳注：「屈折」とは屈折言語と呼ばれる言語（英語やフランス語など）における動詞の活用や名詞・代名詞の曲用を意味する〕。

創意工夫に富んだもの〔ingénieux〕である。それは歴史や神話ではなく、物語である。それは確固たる真偽ではなく、適切さである。それはよそよそしい客体化でもどっぷり浸った主体化でもなく「尖軸存在〔être de pivot〕」<sup>22</sup>であり続ける能力である。

諸々のカタストロフを経験することは、カタストロフを知っているということをも前提とする。われわれの知とわれわれの感性の「空洞に」潜むカタストロフとはどのようなものだろうか。支配的な科学の道具立てや方法を用いて取りかかるとかき消されてしまうような単独性をもつカタストロフとはどのようなものだろうか。そのたびごとに桁外れなもの〔démésuré〕として現れるものの重要性を判断すること〔prendre la mesure de〕はいかにして可能なのか。いくばくかの単独的なものによって特徴づけられるものをいかにして科学にすることができるのか。自然化や標準化のプロセスが感性の尺度を不測事態に移動してしまった以上、「自明である」ようにわれわれに思えるカタストロフとはどのようなものだろうか。カタストロフがわれわれのドラマツルギーの様態に、すなわちわれわれが示したり語ったりする方式に属さないのだから、われわれが注意を払うことのないカタストロフとはどのようなものか。『コミュニケーション』誌の本号が、〔カタストロフという〕語そのものの用法と誤用を解明することを皮切りに、答えようとしているのはこれらの一連の問いである。

### 「カタストロフ」という語

エドガール・モランは1976年に、「危機〔crise〕」という語が、もともとは決断によって実現された決意（ギリシア語の*krisis*に由来する）を意味していたが、今日ではその反対に、いくばくかの逡巡によって特徴づけられる脆弱性という状態を表現するのに用いられていると指摘していた<sup>23</sup>。この意味の横滑りに加えて、危機という概念をこのうえなく雑多な使用域に適用することによって、当の概念はその

<sup>22</sup> ヘーゲルの概念*Zwischensein*のメルロ＝ポンティによる訳語（「Notes de lectures et commentaires sur la "Théorie du champ de la conscience" de Aron Gurwitsch », *Revue de Métaphysique et de Morale*, 3, 1997, p. 321-342）。

<sup>23</sup> Edgar Morin, « Pour une crisologie » (1976), *Communications*, n° 91, « Passage en revue. Nouveaux regards sur 50 ans de recherche », 2012, p. 135-152.

輪郭の一切と、それゆえにその意味の一切を失ってしまう。だからモランは「危機を危機に曝す〔mettre la crise en crise〕」ことが必要だと踏み、そうすることで彼自身の時代に影響を与えているとモランの目に映った脱却という状況（資本主義の、社会の、一夫一妻制の、家族の、価値観の、文明の、人類の危機）の操作概念として危機という概念を立て直すことができると考えていた。

それからおよそ40年経ったいま、同様の情勢の指摘から始めよう。「カストロフ」という語は、もともとは悲劇の最終幕（〔ギリシア語の〕*katastrophè*）を指していたのが、今日では時間の単位（短さ〔*brièveté*〕）にも、場の単位（地点〔*localité*〕）にも、行為の単位（因果性〔*causalité*〕）にも合致しない、そしてときには可視的なものや感性的なもの（すなわち「ベクトル」をなすもの、イメージや物語にされうるもの）の次元に属さない諸々の現象に適用されている。「古典的」な（津波や地震、火山の噴火といった類の）カストロフが、唐突さ、局地化、量化そしてイメージ化といった基準と合致するとしても、道路の事故（連続的なものであれ、離散的なものであれ）、あるいは汚染やストレスといった現象となると事情は変わってくる（これらの現象は上のどの基準とも合致しない）。加えて、「カストロフ」という語の用法は今日では不幸な側面のみ関わっており<sup>24</sup>、この語は両義性と、それゆえに操作的価値をすべて失っている。ゆえにこの用語は一般化されたカストロフ論の一形式の徴候となる。この一般化されたカストロフ論において、この用語は「何かが起こった!」〔という発言〕を署名する〔signer〕ために、さらには「何人が被災者がいるぞ!」と指定する〔assigner〕ためにだけ使用される——そして複数のスカラーをもつ襲、〔カストロフの〕本来の意味をも含むドラマツルギー的な複合体を語るためには使用されない。たとえば知解可能性の多様な体制（英雄、使者、コロスのリーダー、俳優）や行為の多様な体制（人間の、神々の、鑑賞者の、市民の行為）を結びつける大団円の物語などがそれである。

「カストロフ」という語の用法を極端に還元してしまう、こうした変遷過程のしるし、その今日における定義の数々——学術的なものも日常的なものも含め

<sup>24</sup> 古代ギリシア人のケースではないことだが、悲劇作家のカストロフューはハッピーエンドだったりバッドエンドだったりしていて、カストロフは幸福なものにもなりえたのである。

て——、これらは偶発事という要因（出来事性）と強度の比率（重大なインパクト）の組み合わせに還元されてしまう<sup>25</sup>。この計算可能な側面によっては、これらのものが、出来事のカテゴリー（潜在的な無秩序、じわじわと忍び寄る無秩序、知覚に強く訴えかける無秩序、持続する無秩序、冷やかな無秩序、すぐに消え去る無秩序等々）に、もしくは知覚的な傑出性（不可視な無秩序、物音を立てない無秩序、漠然とした無秩序、散り散りになった無秩序、広く行き渡った無秩序等々）に属さない無秩序を包含することは不可能である。それゆえに、持続可能性や理解可能性〔*pénétrabilité*〕によって特徴づけられる脅威（原子論タイプ。すなわち出来事的〔*événementielles*〕でもスペクタクル的〔*spectaculaires*〕でもない、勃興的〔*avènementielles*〕で「亡霊－スペクタクル的〔*spectraculaires*〕<sup>26</sup>な脅威）を立ち去ること〔が必要である〕。また、疎外する標準化という知覚不可能なプロセス（「加速化」<sup>27</sup>タイプもしくは道具的合理性<sup>28</sup>タイプ）を、そして社会のメガシステムの変動が、国内の圏域に対して与える効果（ロビー運動タイプ。すなわち証券取引における投機等）をも立ち去ること〔が必要である〕。したがって、本誌でドミニク・プールが取り組んでいることだが、「カタストロフ」という語に関わる「意味論的運命」の形式に対して反対運動を行うことが重要なのだ。

### 危機からカタストロフへ

エドガール・モランが1976年に書きとめた諸々の危機（経済的な危機と政治的な危機、夫婦の危機と社会的な危機、家族の危機と文明の危機、道徳の危機とエコロジ的な危機）は人間の活動の様々な圏域における通常の機能の一部をなすものとしていまや認められている。無秩序の解釈のレベルは、段階が上がったのだ。〔無

<sup>25</sup> Yoann Moreau, « Catastrophes : l'attribut sauvage », *Le PortiQue*, n° 22, « Catastrophe (s)? », 2008, p. 89-99.

<sup>26</sup> Yoann Moreau, « Le "spectaculaire" (Fukushima est-elle une catastrophe?) », mis en ligne le 28 février 2012, [culturevisuelle.org](http://culturevisuelle.org).

<sup>27</sup> Hartmut Rosa, *Aliénation et accélération. Vers une théorie critique de la modernité tardive* (2010), Paris, La Découverte, 2012.

<sup>28</sup> [Communications誌の] 本号所収の私とフランソワ・ラプランティースとの対談 « La dimension subie »を見よ。

秩序を測定する] 計器は上方修正されたのだ。モランが探った危機は構成的なものとなり、ありきたりなものとなり、日常的なものとなった。危機はもはや機能不全にではなく、科学技術のシステムとグローバル化された文化の様態のありふれた進行に結びつけられているものとして現れる。アノミー<sup>29</sup>はレベルを変えたのだ。エミール・デュルケムが示したように、犯罪や自殺は関係する家族にとってはカタストロフを作り上げるが、社会学者にとっては「普通」のことである。それと同様に、火山の噴火や津波も地質学者にとっては「普通」のことである。グローバル化に由来する、人間活動のシステムの振れ幅にこそ新しさは起因する。諸々の社会からなる集団（多国籍のもの、NGO、連邦国家等々）の尺度が、個人からなる集団の尺度に取って代わろうとしている。社会的に構成されたあらゆるタイプのシステムと相関する構造の効果としてのアノミーは社会システムの構成要素としての個人のレベルにはもはやなく、世界システムの部分としての社会のレベルにある。アノミーはもはや社会についてのものではなく、文明についてのものなのだ。無秩序の知覚やメディア化、その評価においてレベルの移動が遂行されている。「リスク社会」<sup>30</sup>は次第に、カタストロフを体系的に生産する〔fabrique〕「リスク文明」<sup>31</sup>のうちに凝固してしまう。大いなる無秩序の分析レベルを識別することは、諸々の分節化〔articulations〕を理解するのに決定的となる。このことはガエル・クラヴァンディエが本号でのちに、「全社会的事実」としてのカタストロフという考えに築かれた「再整理の想像的なもの」を通じてわれわれに示してくれるだろう。

### カタストロフ状態の文化

文明におけるアノミーは、単に人間活動の無秩序の尺度を変更することによってのみ表現されるのではない。カタストロフはいまや、有限性というアイディアに結

<sup>29</sup> [訳注] 社会解体期において行為などが無規律になる状態を指すデュルケムの術語。

<sup>30</sup> Ulrich Beck, *La Société du risque* (1986), Paris, Aubier, 2001. [ウルリッヒ・ベック『危険社会 新しい近代への道』東廉・伊藤美登里訳、法政大学出版局、1998年]

<sup>31</sup> Patrick Lagadec, *La Civilisation du risque. Catastrophes technologiques et responsabilité sociale*, Paris, Seuil, coll. « Science ouverte », 1981.

びつけられているのである。諸々の不測事態の生産は、惑星規模の尺度、地質学的な尺度、気候学的な尺度、人類学的な尺度に介入してくる。それゆえ、不測事態の基礎をなす制御原則を解体する〔*désintégrer*〕リスクを負うこと無しに、当の不測事態を統合する〔*intégrer*〕することは不可能になるのだ。その基礎というのが生態学的なもの（生物圏）であれ、技術的なもの（進歩）であれ、経済的なもの（市場）であれ、社会的なもの（文化の多様性）であれ、政治的なもの（デモクラシー）であれ、エピステモロジー的なもの（科学的合理性）であれ。この文脈において、「古典的な」危機やカストロフの彼岸が何かしらあるとすれば、現代的なカストロフの彼岸は問いを立てる。有限性という地平のなかにとらえられた現代的なカストロフは、本当らしさ〔*du vraisemblable*〕という場において、かつては（技術的行為という場の外部の）不可能なものや（象徴的行為という場の外部の）思考しえぬもの、（有機的行為という場の外部の）想像もしえぬものに属していたものを結集させる。これによって、〔*Communications*誌の〕本号のなかで、「〔試練などを〕被る文化」に注意が向けられる。すなわち有機的、技術的、象徴的な脱却を導入する支配の喪失が生じるとき表面化する、社会の様態に注意が向けられるのである<sup>32</sup>。諸個人や、個人によって構成される諸々の集団が、自らを取り巻くものを受けような契機に研究を差し向けなければならない——このことが、「被った次元」という題の長い対談のさなかでわれわれがフランソワ・ラブランティースとともに取り組んでいることである。社会的諸事実〔*faits sociaux*〕についてのみならず、社会をばらばらにすること〔*défaire*〕についての知識をも打ち立てる必要があるだろう。また、社会において行動することとその生産についてのみならず、社会において被ることと、社会からの離脱〔*défection*〕についての知識をも打ち立てる必要があるだろう。文化や社会制度にかんする表現のこうした側面は否定性や文化の否定として検討すべきものではもはやなく、人間社会が現在、もしくはその歴史における別の時点で経験する脱却の時代を通過し、乗り越えるための教養深く、計画的な方法として検討すべきなのだろう。

そのために、われわれは「余白を用いて」、すなわち生態学的=エコロジー的、

<sup>32</sup> この最後の〔象徴的な脱却という表現の〕作用域については、*Communications*誌57号、総特集「Peurs」（1993）を見よ。

エピステモロジー的、存在論的な「掛け金 [décroche]」を用いて、カスタロフにアプローチしてきた。こうした迂回は「不品行モデル」と映る。すなわち、このようなモデルは、カスタロフの時代でない社会において周縁的、さらには否定的に見えるが、他の社会もしくは深い危機の時代においては紋切り型なものとして、適切なものとして現れる。こうした迂回によって、合理的思考や文化の支配的な様態といった観点から、「主体の埒外」のカスタロフを可視化したり、当のカスタロフに対して影響力を持ったりすることが可能になるのだ。

以上のことは次のことを経ると考えよう。すなわち再シナリオ化のプロセス（言語やドラマツルギーの様式、知の生産様態を多様化することで、思考可能なものの諸境界を変化させること）、適法性が複数あることを受け入れること（支配的ではない文化図式に由来する「門外漢的な」知の数々を統合することによって）、エピステモロジー的なレベルと存在論的レベルの諸々の連結を再構成すること（リスクという観念から脅威という観念への移行<sup>33</sup>、政治主体という観念から主体の政治およびコスモポリタニズムという観念への移行）である。

### グローバルなものの極端さ：三重の脱却

科学技術システムと「近代的な」文化図式のグローバリゼーションは、三重の喪失を引き起こし、主要な不測事態にかんして三重の脱却という形で現れる。

#### 第一の脱却：食-宇宙 [la cosmophagie]

二者択一的な文化マトリクスに基づく社会（それはすでに自らの内部でカスタロフを構成している）の瓦解は、支配的なモデルを逃れ去るものを捉えるのに適した、中心からずれた眼差しの可能性を消去する。「原初的」となおも形容される人間集団が徐々に消え去っていったことによってわれわれは、「勝者の歴史」から捨て去られたカスタロフに関する「敗北者のヴィジョン」<sup>34</sup>の、何にも代えがたい

<sup>33</sup> Dominique Bourg, Pierre-Benoît Joly, Alain Kaufmann, *Du risque à la menace. Penser les catastrophes*, Paris, PUF, 2003.

<sup>34</sup> Nathan Wachtel, *La Vision des vaincus*, Paris, Gallimard, 1971. [ナタン・ワシュテル『敗北者の想像力 インディオのみた新世界征服』小池佑二訳、岩波書店、1984年]

恩恵を奪われてしまった。集団的記憶によって隠蔽された破壊のプロセスを丹念に詳らかにした研究はわずかながらいくつかあるとはいえ——第二次世界大戦中にドイツの都市に対してなされた爆撃についてのゼーバルトの研究を思い浮かべてみよう<sup>35</sup>——、自らの目に適切だと映る社会の様態や文化の原動力を語り、各々の見地から説明し、描写する権利はカストロフを被った人々にも等しくある。以下のような仮説から出発しよう。すなわち、(個人的なものであれ、家族的なものであれ、社会的なものであれ、種的なものであれ、カストロフに直面した) 生存の具体的な様態は、文化領域の付帯現象的な戦略を構成するばかりか、そのような戦略の構成要素であるのだ、と<sup>36</sup>。

しかしわれわれはなおも、その程度まで分析された人々、たとえばかつて植民地化された土地の人々や、数で言えばより少ないが、文明化を促す大企業の周縁で忘れ去られた人々などによって実現された人類学を待望しているのだ。ここでもまた、「ネイティヴの」国家(すなわち近代〔的な地域〕に由来しない〔non natives〕国家)に出自をもつ人類学者の貢献によって、視点の転覆がもたらされる。この転覆を判例的な仕方で例証しているのが、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロやアルジュン・アパドゥライの仕事である。文化図式の均一化としてのグローバリゼーションは、(研究者の境遇による先入見と結びついている) 認識論的な自民族中心主義のみならず、(他性の不在と結びついている) 存在論的な自民族中心主義を作り出してしまう。この意味で、フレデリック・ネイラは〔*Communications*誌の〕本号で、グローバリゼーションのもつ文字通りの「食-宇宙的〔*cosmophagique*〕」次元——すなわち、「自分でないものを食べつくし、殲滅するよう人間を仕向けるゆっくりとしたカストロフのプロセス」——を捉えるようわれわれを促している。

文化のグローバリゼーションによって引き起こされるカストロフへの盲目

<sup>35</sup> W. G. Sebald, *De la destruction comme élément de l'histoire naturelle* (1999), Arles, Actes Sud, 2004. [W. G. ゼーバルト『空襲と文学 (ゼーバルト・コレクション)』鈴木仁子訳、白水社、2004年]

<sup>36</sup> Barbara Glowczewski, Alexandre Soucaille (dir.), « Désastres », L'Herne, « Cahiers d'anthropologie sociale » 07, 2011.

は、まさしく視点の多様性の破壊である。この破壊は、カタストロフィックなものを、カタストロフの自然主義的な受容<sup>37</sup>に、すなわち「物理性」（死者や物的損害の数）という観点で還元するという形で現れる。この還元は、人間たちの尺度で、より「ローカルな」現実によって埋め合わされるべき見積もりである、と〔*Communications*誌上で〕後にサンドリン・ルヴェットが示している。尺度という要因に相関するように、自然主義的な図式は、宇宙論的構造に属さない次元を過小評価する——さらには捨て去ろうとする——傾向にある、言い換えるなら（性の喪失ではなく）活力の喪失という形で現れる、以下のようなことを指す。すなわち、「内面性」と、われわれを取り巻くものの量的な側面とに対する影響（アニミズム的図式）、関係者の記憶の歷程への影響（トーテミズム的図式）、たとえば人間と人間ならざるものとを結ぶ経済〔*économie*〕とエコロジー〔*écologie*〕にかかわる統制的な側面への影響（類推的図式）<sup>38</sup>。

## 第二の脱却：無気力

電気システムと科学技術システムの一般化と、ますます緊密なものとなっている両者の相互依存には社会の日常的機能を、世界規模の単一ブロック的なひとつのシステムに変形しようとする傾向がある。システムにかかわるこの巨大な総体に内在する変動は、人々全体に影響を与えうる。すなわち原材料に対する投機と関連した飢餓、コンピュータのアルゴリズムのもと自動化された決定装置に起因するドミノ倒し効果による経済危機、天然資源の圧搾に応じた生活様式の極端な変動等々である。危機という語は、それが世界規模の尺度に適用されると、国家レベルでのカタストロフを覆い隠してしまう。たとえば、「2007-2008年の世界食糧危機」は「飢饉擾乱」、あるいは数々の国（カメルーン、コートジボワール、エジプト、ハイチ、インドネシア、フィリピン、セネガル）での衛生上のカタストロフと表現された。同じことは経済危機（とりわけ1929年から1937年の世界大恐慌）や、生態学的危機（エルニーニョ）にも当てはまる。

<sup>37</sup> 「物理性」、「自然主義」、「アニミズム」、「トーテミズム」、「類推論」という語の意味については、Philippe Descola, *Par-delà nature et culture*, Paris, Gallimard, 2005を見よ。

<sup>38</sup> Yoann Moreau, *Catastrophes et Mondes*, thèse citée.

人間活動の諸々のシステムのレベルの変化に内在する問題の波及効果を説明することができるということが重要なかもしれない。われわれの実存がつねにうたかたのものであったとしても、尺度のこのような交差は、われわれの実存を、ギンター・アンダースの表現を繰り返すなら「二乗された意味でのうたかたのもの」にする。すなわち「われわれは一個の間奏曲のさなかの、諸々の間奏曲となった」<sup>39</sup>ということである。カタストロフの系統学の構成でもって、個人という尺度（主体）は、破壊の存在論的参照項ではもはやなくなるという方向に向かっていく。というのもこの尺度は徐々に、様々な集団（社会、種族等々）の消滅のもとに包摂されていくからである。これをアンダースは「形而上学的メタモルフォーゼ」と形容するこの側面は、主体の不能感という形で表現される。惑星規模の脅威は個人がもつ理解力、知覚、想像力＝構想力という能力を超過してしまう。彼が言うに、このことによって個人はこのような脅威を「実在する対象」<sup>40</sup>として記録し認めることがなくなり、無関心や「存在論的無気力」という形式を展開することになる。カタストロフは、その巨大さによって、主体を人間としての死の不安から「解放する」。アンダースの分析によると、主体は「われわれは皆、死を通るのだ」とか、「ひとは皆一緒にくたばるのだ」<sup>41</sup>などと言うことで安心する。近代的主体とグローバル化されたシステムとのあいだの、協働という形にまで押し進められた共謀は、存在論的なカーソルを「より深い層」<sup>42</sup>の方へ移動させる。この層は各人の責任のみならず、人類を構成する「われわれ」なるものをも、再び問いに付すのである。この「われわれ」が危機の尺度に照らした意味を持つなら、言い換えると、決定行為（*krisis*）が可能であり続けるなら、「われわれ」なるものは、惑星規模のシステムの表面効果<sup>43</sup>に起因するカタストロフの尺度に照らした価値を一切失ってしまう。このような、個人を「主体の埒外」におくこと——サンドリン・ルヴェットが〔*Communications*誌〕本号で、カタストロフを計算するという行為と、カタストロ

<sup>39</sup> Günther Anders, *Le Temps de la fin*, Paris, L'Herne, 2008, p. 18.

<sup>40</sup> *Ibid.*, p. 41.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 43.

<sup>42</sup> *Ibid.*, p. 68.

<sup>43</sup> 〔訳注〕物理学の用語で、翼状の物体が地面もしくは水面の近くを移動するさいに、当の物体と表面とのあいだの空気流の変化に影響を受けることを指す。

フを語るという行為のあいだの「グローバルな」接合という具体的な問題を起点に論じていることだ——もまた、カタストロフのコスモポリタニズムと生政治についての研究において取り組まれていることである<sup>44</sup>。

カタストロフのシステムの次元は、リスクという観点において、カタストロフについての支配的なアプローチに重大な影響をもっている。不測事態と不確定要素という、蓋然性の計算と緊密に結びついたもの問題は、人間の経験の時間性をオーバーしてしまうような大きさの次元をもつシステムと相関した、偶然の出来事を説明することはできない。「波尾 [queue d'onde]」<sup>45,46</sup>、「野生の偶然的な出来事 [hasard sauvage]」<sup>47</sup>、「分岐」と「特異点 [singularité]」<sup>48</sup>、さらにはアンリ・ポアンカレが遙か昔に示したところの、単純なシステムにおけるカオスの進展（周期的かつ非線型的的）といった問いは、科学の基礎づけにおいてカタストロフィックな「くじ引き」の分析という問題をはらんでいる。「一般的なものについての科学以外に科学は存在しない」と主張するアリストテレス的な原理はカタストロフという問題系を「主体の埒外」に置いてしまう、というのも、カタストロフとはそれがまさにつねに単独的＝特異な [singulière] なものであってはじめてそのものとして知覚されるからだ。*Communications*誌本号のなかで数学者ニコラ・ブローが綴った論文が、この問いに取り組んでいる。彼は認識における単独的＝特異なもの場の

<sup>44</sup> 総論および「現実主義的コスモポリタニズム」の提案としては、Ulrich Beck, « La vérité des autres. Une vision cosmopolitique de l'altérité », *Cosmopolitiques*, n° 8, « Pratiques cosmopolitiques du droit », 2004, p. 157-184 ; sur la dimension biopolitique, Frédéric Neyrat, *Biopolitique des catastrophes*, Paris, MF, 2008を見よ。

<sup>45</sup> Nicolas Bouleau, *La Règle, le Compas et le Divan*. Passions mathématiques, Paris, Seuil, 2002.

<sup>46</sup> [訳注] 波動において、同位相のもの同士を繋いでできる面を「波面 [front d'onde]」と呼ぶ（音などの疎密波において、同じ密度の箇所を繋いでできる面をイメージするとわかりやすいだろう）。これの正面＝額 [front] と尾 [queue] を入れ替えて作った造語だと思われる。したがってここではさしあたり「波尾」と訳した。

<sup>47</sup> Benoît Mandelbrot, *Fractales, Hasard et Finances*, Paris, Flammarion, 1997 ; Yoann Moreau, « Catastrophes : l'attribut sauvage », art. cité.

<sup>48</sup> René Thom, « Crise et catastrophe », *Communications*, no 25, « La notion de crise », 1976, p. 34-38.

を再検討し、普遍的な言表（「すべてに対して」）と実存的な言表（「彼が存在する」）の二重性を表現しなおそうと提案する。彼によると、これは彼が「問い存在 [être-question]」と見なすよう推奨する同じ現象の周りに一貫するシナリオの複数性の、絡みあった定式化を基礎にして構築された「共-真理 [co-vérités]」の陳述によって作動する。

### 第三の脱却：不可視なもの

カタストロフ論〔極端な悲観主義、行きすぎた危機論〕を脱するために、われわれはドラマツルギーモデルを問うこともしなければならない。このドラマツルギーモデルという尺度によってわれわれはカタストロフを構成するもの——もしくは構成しないもの——を打ち立てているからだ。（図形的なものだけでなく言説的な）形（式）[formes]を、（量的なものだけでなく質的な）方法を、プロトコル（すなわち知の生産、構成、伝達のプロセス）を提案する必要がある。さらにこれらの形（式）や方法、プロトコルを、スペクタクル的なものやうわべの事実だけを記述する [événementiel] ものではないような、重大な不測事態を説明するのに適したものとしなければならない。この問いは目に見えず、漠然としていて、散らばっていて、不連続的で、「じわじわと忍び寄り」、広く行き渡っているなどと形容される無秩序にとって決定的である。汚濁や汚染、ストレス、公害（物理化学的な意味でも、象徴的な意味でも）といった事例だけでなく、それらの事例がさまざまな文化、つまり学術的、芸術的、その他の文化によって扱われる仕方が、このカテゴリーに入ってくるのだ。〔Communications誌の〕本号はこの二つの側面にも取り組んでいる。ミカエル・フェリエの論文は、福島での放射性物質の拡散によって引き起こされた無秩序とストレスを「美術の領域において」書き込んでいる。彼は、なおも発明されるべきドラマツルギー [une dramaturgie encore à inventer] という地平のなかにこの問題を位置づけている。詳細には、彼は現代の作品をつうじてこの地平を探求している。そうすることで、崇高なものは否定性の経験と矛盾なく隣りあい、芸術と美学は合理的で技術的な援助の可能性の条件に寄与するのである。バルバラ・グロフチェフスキは、植民地化のさなかで紆余曲折を経て「xな」人々（x = 最初の、原初の、未開の等々）がはまりこんでしまうある種の泥沼が秘められてしまうということを暴き出している。この鉤括弧の用法は意味深く、それは汚泥の

なかで、実に多様な技術、美学=感性論、政治の様態、語りや劇作の方法、生態学的方法や認識論的方法等々を分類しなおし、区別し、固定する。しかしオーストラリアのアボリジニーはアート市場のおかげで、このぬかるみから一部脱出している。アボリジニーたちが古来からのカストロフについて議論する仕方を詳細に研究することによって、もはや被られ退廃したものとしてのみならず、際立って創発的かつ文明化を促すものとして現れる歴史のシナリオを編み直すことが可能になるのだ。

### 主体の埒外で

支配的な合理性という文脈において、四つの関係が、カストロフの扱いにかかわっているようである。カストロフが主体の埒外に置かれるのは以下の四つのものでからの分離である。a) 存在論的なものと政治的なものからの分離。すなわちカストロフには原因となる動因がなく、主体は自分がかかわっているとは感じない傾向がある。b) メディア的なものと意味論的なものからの分離。すなわちカストロフはスペクタクルとはならず、主体は当のカストロフを伝えることができない。c) 認識論的なものと認識的なものからの分離。すなわちカストロフは知にとっての例外となり、主体はそれを既存のカテゴリーに還元しようとする傾向にある。d) 実験 [l'expérimentation] と経験 [l'expérience] からの分離。すなわちカストロフは実験で生産されるような対象ではなく、主体はカストロフをそのラディカルさにおいて体験することができない。

言い換えるなら、カストロフは諸個人の興味喪失を引き起こす。この興味喪失は、責任や実存の地平といった観念を徹底的に考え直すことを強いるが、さもなければある種の「存在論的無気力」が一般化するのを見ることになる恐れがある。カストロフはその現象的でない次元によって、自らに対するドラマツルギーを、すなわちそれを用いてわれわれがカストロフの説明や物語をなすことができるような語りの様態と視覚の様態を再検討するよう促す。そこから科学と技芸 [art] のシナリオの組み直しおよび両者が絡み合う研究の必要性が生じる。カストロフはそのつねに単独的であるという性格によって、一般性と一般化に、そして繰り返しと因果関係に基礎づけられた知のパラダイムの境界に位置している。これによってわれわれは、主体の経験の領域を再び動員するよう促される。カストロフは、

日々の実践が妥当性を失うような状況を引き起こすために、そうした実践の証をプラグマティックな仕方で作り出す「ブリコラージュ」のような、不安定な働きを当の実践に結びつけることを促進する。

カタストロフを生きる＝経験することはわれわれに、大いなる無秩序によって生み出された現実と「整合的〔consistant〕」であるよう促す。すべての個人とすべての社会がコントロールからの脱却とコントロールの喪失を免れない〔sujet à〕ものであることを認めるなら、この「整合性＝一貫性〔consistance〕」（ラテン語で「ともに保持する、同じ席に着く」を意味する*con-sistere*に由来する）が前提としているのは一方で、われわれが何をしようとカタストロフには不正義や不条理、醜悪さが課されているということ、そして数多の大規模な出来事が存在論的、認識的、認識論的、ドラマツルギー的な意味での領域の外部〔hors-champ〕に属しているということ、要するにカタストロフとは本来、主体の外部〔hors sujet〕が突如として出現することであるということだ。他方でこの主体の外部に対する主体の整合性＝一貫性は、一切の宿命を拒否することをもたらす。この整合性＝一貫性は否定的なものの労働を行う。この否定的なものの労働は、失望や無力感、孤独感に直面しながらも、いかなる形式の投げやり、興味喪失、実存的な怠慢に抗して戦う。*Communications*誌本号では、喪失状態、失敗した状態、無力な状態のなかで作上げられたタイプの知、社会性、実践の手がかりと兆しを提示するつもりである。これらのものこそ、われわれが「被ることの文化」という表現で意味するものである。後に続く論文が、支配的な近代におけるまことしやかな二つの傾向、すなわちカタストロフ論〔極端な悲観主義、行きすぎた危機論〕（カタストロフはいつでもどこでも存在している）とおめでたい実証主義（つねに何事をもコントロールできる）を長い目で見て方向転換することを可能にしてくれるかもしれない、いくつかの目安を与えてくれることを望んでいる。

Yoann Moreau « Des catastrophes « hors sujet » ».

Reprinted by permission of Yoann Moreau

訳＝吉松覚（京都大学博士課程）